



2021年4月号 (No.7)
 公益社団法人 日本山岳会
 The Japanese Alpine Club
 東京都千代田区四番町 5-4
<https://www.jac1.or.jp>
 編集担当: 新井 梓

3カ月に一度発行する「山」YOUTH版では、YOUTH CLUB 世代の会員のご活躍、東京や各支部のYOUTH CLUBの取組みなどをご紹介します。話題のご提供や感想など、ご意見何でもお待ちしております！

新 YOUTH CLUB 委員長の挨拶

楽しめる環境を整えるのが自分の務め

松原 尚之 (まつばら まさゆき)

ユースクラブは、いまや100名を超す大きな組織で、メンバーは、ハイキング、縦走、岩登り、雪山などを楽しみながら活動している。2021年4月から、山岳ガイドの松原尚之さんが、中山茂樹前委員長の後を継ぎ、ユースクラブ委員長に就任。就任にあたっての抱負を、松原さんに語っていただいた。

この4月からユースクラブ委員長を引き継ぐことになった。ユースクラブ委員会は、青年部、WV部、学生部を統括する組織である。私が学生部委員長となって日本山岳会と深く関わるようになったのは大学4年生だった1988年のことであり、青年部担当理事(兼青年部代表)を務めていたのは8000m峰通いに一区切りをつけた30代半ばの頃である。あれから長い月日が流れ、ふたたびこうした役に就くのも思えば不思議な縁である。

日本山岳会は今も会員の減少と高齢化に悩む。その流れに楔(くさび)を打ち込む形で2012年につくられたのがユースクラブ委員会で、休眠していた青年部を再生し、新たにWV部を創設し、若い会員を集めてきた。構想から10数年に渡りユースクラブの活動に心血を注いできた方々の努力の結晶である。その活動は必ずしも順風満帆なものではなく、定着してくれたメンバーも多くはないが、その中から少数とは言え、青年部やWV部の中核として組織を引っ張る、新しい若い会員が育ってきている。その中心メンバーは本格登山の経験が豊富なわけではなく、社会人になってから登山をはじめたものも少なくない。しかし真摯な情熱を抱き、向上心を持って登山に取り組んでいる。そればかりか日本山岳会という組織(と人)に愛着を抱き、活動を続けてくれている。そんな若い中間の存在は、私にはちょっとした奇跡のように思える。

WV部や青年部は、日本山岳会という伝統ある大きな組織に属しているがゆえのよさと、あわせ

て運営の難しさを抱えている。メンバーは悩み、模索しながら活動を続けているが、私は彼、彼女らに、まずは自分たちが楽しんで活動することに



南極点徒歩到達、マカルー東稜初登攀、K2登頂など、数々の実績を持つ松原新委員長

主眼をおいてほしいと願うし、その環境を整えることが自分の務めだと思っている。

2年目の学生部委員長を務めた1989年度、私は韓国の学生との交流登山やヒマラヤ遠征の実施など、とても充実した1年を過ごさせてもらった。所属した大学山岳部での活動に加え、学生部で得た経験と友人は私の大きな宝となった。大学生はコロナで受難の時ではあるが、学生たちにはその活動を通じて、大学の部活動とはまた異なる刺激や友人をぜひ得てほしいと願っている。

そして、その学生部を卒業したものの多くの人がその後JACとのつながりを絶ってしまうのはとても残念なことだし、今後のユースクラブを考える上で大きな課題の一つであると考えている。青年部やWV部のメンバーに若い学生部出身者も融合する……。そんなユースクラブを夢見て、拙くも新たな一歩を踏み出そうと思う。

REPORT 雪崩講習会に参加して

雪崩に遭った経験はないが、その怖さは当会の多くの先輩方からお聞きしていた。そのリスクを低減するためには、雪崩の仕組みを知り、万が一遭ってしまった時の対処を知ることだ。そう考えて、個人的に雪崩事故防止研究会のAvalanche Search & Rescue（以下、AvSAR アプサー）の講習会に参加してみた。ユースクラブには、AvSAR 講習の概要を知らない会員も多いのではないかと。その概要と所感などをまとめてみたので、参考にいただければ幸いである。

3月7日（日）、8時に谷川岳ベースプラザに集合したのは、講師やスタッフ8名と30名の講習生。今回参加したのは、日帰りのbasicコース（より高度なAdvanceコースもある）だ。慶應大学や立教大学の学生さんもいたし、全体として20代～40代が中心で、若い世代が集まっている印象だ。

プラザの奥に用意された机に着席すると、代表・阿部幹雄さんの挨拶。今年の2月末にも北海道大学山スキー部の学生4名が大雪山系上川岳で雪崩に遭遇したが、このパーティはAvSARの講習を受けていたため、完全埋没した4年生2名を、残りの4年生と1年生が助け出し、自力下山することができたそうだ。

講師紹介に続き、午前中の座学開始。パワーポイントを使って、雪崩が起きやすい地形条件や雪崩トランシーバーの仕組み、救助のためのショベルリングの方法などを講師の皆さんが解説してくれた。いずれも山を生業としているガイドや登山ショップ勤務の方々である。携帯電話と雪崩トランシーバーは電波干渉を避けるために50センチほど離すべきとか、完全埋没も18分以内に掘り出せば、助かる確率が高いと報告されているとか、新しい数字に基づいた知見も紹介されており、学ぶところが多かった。雪崩トランシーバーの仕組みについての専門的な話題になると、アドバイザーの榊原健一先生（北海道医療大学）が講習生の疑問を端的な補足コメントで解してくださる。

「雪崩トランシーバー」とは、電波信号の送受信によって双方の位置を検知する機器で、いままで「ビーコン」と呼ばれていた。雪崩リスクのある雪山に入る際にはパーティ全員が雪崩トランシーバーを装着して、電波を発信する状態にしておく。万が一誰かが雪崩に飲まれたときには、飲まれなかったメンバーが雪崩トランシーバーを発信から受信に切り替え、埋没者がどこにいるのかを電波でキャッチする。雪崩トランシーバーのモニターには埋没者ま

での距離が出るため、雪崩の走路上を探索し、距離が最も短くなる場所に当たりをつけ、プローブという、3メートル前後の組み立て式の棒で雪面を挿す。プローブに人間らしきものがヒットすれば、急いでショベルで掘る。今回の訓練は、雪崩トランシーバーの特性や使い方を理解し、雪崩埋没者の探索・救出の基礎手順を学ぶのが目的だ。

午後はプラザ近くの積雪がある場所で実地講習。3班6パーティに分かれて、座学で学んだ手法を体験した。その一部を以下の通り紹介する。

- 雪崩トランシーバーの装着：雪山に入る前に雪崩トランシーバーをつける。身体から離れるリスクを避けるために、脱ぎ着をするようなウェアの上に付けたり、縫い付け型ポケットに入れない。
- グループチェック（ダブル、シングル）：パーティメンバーの雪崩トランシーバーがきちんと作動するかどうかを、リーダーとメンバーが互いにチェックする方法。
- シャベルリング：実際に人が運び出せるサイズの幅をチームで掘ってみる。最初に掘る範囲を決めておき、複数名がローテーションしながら、一列に並んで掻いた雪を後ろに送っていく。いかに早く掘り出せるかが結果を左右する。
- プロービング：プローブの効率良い組み立て方、雪面への安定した挿し方。スパイラルプロービング（渦巻状にプローブを挿す）、ラインプロービング（雪崩トランシーバーがヒットしない場合に、複数名が横並びで行う）なども体験。
- エアポートアプローチ：100メートルほどのレーンで、埋没者を想定して埋められた雪崩トランシーバーを、自分の持っている雪崩トランシーバーを使って埋没位置を見つける練習。
- シナリオトレーニング：総括として、「山で雪崩に飲まれたパーティに援助を求められ、雪崩トランシーバーを使って探索し、埋没者を掘り出す」

という想定で、一連の流れを班ごとに復習。リーダーの采配がものを言う。



プロローピングの練習風景

◆参加してみて

当会の雪崩講習会には何度か参加したことがあるのだが、雪崩や雪崩トランシーバー操作に関する知見は少しずつ進歩している。だから「講習を受けたことがある」で安心してはダメで、電子機器を扱う雪崩搜索は、最新の知識に更新していくことが必要だと感じた。また、こうした講習にはよく一緒に山へ行くパーティで参加し、手順を全員が知っておくことが望ましい。パーティでの参加が難しい場合は、リーダーがパーティに伝達講習をするなど、知見を共有すると良いかもしれない。

それから、AvSARの講師陣の皆さんのすがすがしい熱意も印象的だった。山の素晴らしさと怖さをよく知っている方々だからこそ、初めて会った講習生に対しての態度も真剣だる。

講習に参加した1週間後、乗鞍岳で痛ましい雪崩

事故が起きてしまった。登山者がきちんと雪崩トランシーバーをつけ、さらには現場にいる人が1人でも多く、こうした搜索手法を実践できれば、結果は変わったかもしれない。

積雪・天候の観察やピットチェックを行って雪崩に遭うリスク自体をさげることは大切だが、「まさか」の不意打ちをするのが自然である。そのことをよく認識しながら、今後も雪びの機会を大切に雪山を楽しんでいきたい。

(ワンダーフォーゲル部・新井梓)

角打ち
コーナー

前っちの山と酒

出雲の酒、「天穩」を呑んだことはあるだろうか。古の時代、出雲とは西の端は島根県大田にある三瓶山、東の端は鳥取県米子を含み、大山(伯耆大山)までの事をさし、神在月には全国からこの地に神様が集結する。天 穩はそんな地の酒で、祈りを捧げたものが 酒になって生まれてくるという思想のもと、出雲杜氏が醸している。酒 造りとは、ご先祖様や神様が眠る 山の清らかな水で育てた米を人の 手で洗練させ、神様や自然への感謝を表現する行為で、これが 御神酒の所以でもある。神 様に供えた酒を呑むことで神 様と一体となり、さらに皆で 酒を酌み交わすことで皆が 一体となる行為が祭りである(直会)。次の山には土地 の水と米で醸された酒を担ぎ、 神様とパーティー同士が一体と なる山登りを計画してはどうだろう。 天穩なら常温でもお燗でも嬉しい。天穩を呑み、祈りが込められた酒を是非感じていただきたい。

(青年部・前川晋也)

☞ “天穩” 島根県出雲市、板倉酒造

雪崩事故防止研究会 ASSH と阿部幹雄さん

ASSHは北海道をベースに活動する組織で、阿部幹雄さんが代表をつとめる。1991年、北海道大学山スキー部OBの阿部さんら3名で立ち上げられた。目的は、雪崩から命を守ること。阿部さんは、1981年、北海道山岳連盟隊としてミニャ・コンガ(中国・四川)登頂へ挑戦した際、ザイルにつながれた7人の仲間が目の前で滑落してゆくという経験をされている。そのことを書いた『生と死のミニャ・コンガ』や『那須雪崩事故の真相 銀嶺の破断』『ドキュメント雪崩遭難』(いずれも山と溪谷社)といった著作でお名前を知っている方も多いだろう。

28歳でミニャ・コンガの悲劇に遭遇した阿部さんは、その後ずっと遺体の搜索收容をする中で、遺族や周囲の人間の苦しみを見てこられた。「山から生きて帰ることが、山に入ることの責任の取り方です」。会場にいる講習生に向かって、ご自身の思いを静かな口調で伝えていた。講習時はすべてを若いガイドの皆さんに譲り、ご自身は写真撮影に徹しておられ、教育者でもあるのだと感じた。

連載 **7** 春 ^{かんたん} 邯鄲一睡の夢

東さんの **乱学塾**

筆者は富山で山を学んだ。その時の経験を軸に、春の山の魅力と厳しさを語ろう。

春、劔岳は重苦しいバールを脱ぎ陽光に恵まれて縦横無尽に登ることが出来る。ベースキャンプから日付が変わると同時に、ヘッドランプの光を頼りに氷化した谷を登り詰め、太陽の光と共に、鋭い岩稜や雪稜に取りつき攀じめる。満月の夜は格別、月光を頼りに氷壁を攀じって日の出とともに劔のいただきに立つ。雪を利して素早くベースに戻り、雪崩の轟音を聞きながらの午睡は岳人の特権だ。頂から頂へスキーを使って巡るのも良い。

立山から槍ヶ岳のスキー縦走は最後の滑走が楽しい。槍の頂上から遙か立山を望み、午後、締まった飛騨沢にカービングを決めて滑り出せば、日没時には新穂高につくだろう。白馬から日本海も朝日岳から高低差 1000m の大斜面で最高の滑りが楽しめる。最後は夕陽の沈む日本海にたどり着き山行を締めくくる。共に 3 日で十分走破出来る。

春の山は技術と体力の調和で無限の喜びを味わうことの出来る最高の季節だ。また春の光は恵みをもたらす。先述の白馬から日本海に滑り降りたとき、こしあぶら・タラの芽・こごみを手に入れながら下った。

筆者は花の美を理解する感性に欠けるが、^{かたかこ}堅香子の可憐な青や、山桜の薄紅の美しさには心が動かされた。機会があれば坂田峠を春に訪れてほしい。山菜の宝庫、いや可憐なお花畑が車を降りてすぐのところに広がる別天地である。

一方、天候の読みを誤れば命の危険にさらされる厳しい時期でもある。私たちは天気に対して深い読みを出来るだけの学習を積まなければ、この時期の山に向かう資格はないと断言しよう。今様々に気象情報を手に入れることが出来る。<https://www.windy.com/> は任意の山の天気のみならず、降雨量・標高毎の気温に加え、ヨーロッパ中期天気予報センター・ドイツ気象局・アメリカ海洋大気庁・meteoblue の予報を比較することが出来る。



最後に越中国司^{おおもものやかもち}大伴家持の歌を紹介して筆を置こう。

立山に 降り置ける雪を 常夏に見れども飽かず 神からならしものふの 八十娘子らが 汲み乱ふ 寺井の上の 堅香子の花

(東 秀訓)